



中庭に置かれたベンチに腰を降ろし、恵美子は足許の落葉を靴の先で軽くつついてみた。  
乾いた音を立てて枯葉が形を崩す。

戸惑いと、それとは別の感情が彼女の中で複雑に絡みあっていた。  
九十九との会話が、まだ耳の奥に残っていた。

◇

「統合失調症と判断しがちな彼女の症状は、フェイクだ」

「フェイク？」

「我々を袋小路に誘い込む罠さ。勿論、あのお姫サマが意図的にやっているという意味じゃあない。こっちが勝手にミスジャッジを下しているに過ぎないんだがね」

パイプ椅子を木馬のように前後に揺すりながら、九十九は暗く熱の籠った口調で続けた。

「ある日突然、訳も判らずこうなってしまったんじゃない。少なくとも始まりはハッキリしている。あの夜、だ。そしてそれに関わった人間…」

九十九が指を一つ立て、ユックリと恵美子に向ける。

「わたし、ですか？ わたしがなにか知ってると？」

「ま～さかぁ～、でも誰がどう繋がっているか、エミちゃんは判ってるんじゃない？」

いきなりC調に戻った九十九が崩れた笑顔で笑った。

目だけが全く笑っていなかった。

そう…

ワタシは知ってる…

だが恵美子は、それを口にしなかった。

答えない恵美子に九十九が言う。

「『棚上げ』というのはね、彼女があの日、心的ショックから自らの心を封じた事を言ってるんだ。僕らはそれを診ながら、なにも出来ずにお手挙げ、と。滑稽だと思わないかい？」

「…」

「人の心は容易に正体を見せない。誰もが、自分をいつわる事については巧まざる一流詐欺師なんだよ。だが僕は騙せない。全ての鍵を握るのはあの少年だ」

「…」

「彼女を野放しにしてるのはね、奇形化したトラウマが噴き出すのに任せて、心的な障壁の弱まる時期を待ってるからさ。ガードが下がった頃を見計らい、彼を彼女にぶつける。面白いものが見られるかも知れないよ」

「…先生はまるでゲームでも楽しんでいらっしゃるようですね。それは医師として、あってはならない姿勢ではないですか」

重い口を開き、恵美子はやっと反論した。

「仕事は楽しまなきゃ。医者はね、治療を『趣味』にしてもいいんだよ」

笑わない目をした九十九が、更に大きく笑ってみせた。

「趣味、ですって？」

恵美子は耳を疑った。

「それじゃ先生は、彼女を趣味で治療すると言うのですか？ 自分のことだけ考えて主治医を引き受けたとおっしゃるのですか！ そんなことが許されるとでも思っているのですかっ！！」

椅子を揺らすのを止め、九十九がユラリと立ち上がる。

ゆっくりと両手を白衣のポケットに入れた彼からは、いつの間にか笑みが完全に消えていた。

「ああ。その趣味が患者の利害と一致するなら何の問題もない。医療の歴史がそれを証明している」

厳かに、だが少しの人間味も見せず九十九は恵美子に宣告した。

「今はまだその時期では無い。今日の有り様を見れば明白だ。衣笠クン、君には大事な役を演じてもらう。二人を監視し、来るべき日まで引き離し、その時が来たら接触させる。二人きりで、だ」

瞬きもせずこちらを覗き込んでくる九十九の前で、彼女は射すくめられ身動きがとれなかった。

へびに睨まれた蛙…

いや、先生はまるでメフィストフェレスのようだ

地獄の知恵を授ける、悪魔の王

「ど、どうしてワタシが？」

唾を飲み込もうとしたが、口の中がカラカラに乾いていた。

「担当じゃないか。それにキミも知りたいんだろ？ あの少年の『力の秘密』を。もしかすると君の恋人も回復する望みがあるかも知れないからねえ」

九十九が唇の両端をずいと引き上げてみせた。

V字を描く悪魔の笑みだった。

今度こそ恵美子は驚愕した。

どうしてしてるの！？

「全部、調査済みだ。君がどうして看護師を志したか。どうやって彼女の担当になったか。そして彼、堀川殉の能力に尋常でない興味をしめすのか。助けたいんだろ？ 若年性アルツハイマーの彼氏を」

…もう何も言えなかった。

全てを見抜かれた恵美子には、九十九の言葉に従うしかなかった。



ベンチに座ったまま恵美子は空を仰いだ。  
寒さの強い冬の空は、雲一つなく澄み渡っている。

「こんな所でたそがれてるなんて。らしくないぜ、エミちゃん」

ダミ声ですぐ近くから響いた。  
視線を下ろした恵美子の目に、見慣れた男の姿が映った。

「銀…さん…」

立ち上がった恵美子は、銀さんに抱きつくと人目もはばからず泣き始めた。  
まるで幼ない子供のように。